北海道新聞 デジタル

亡き母へ…プロの夢貫く　星槎道都大の滝田投手　最速１５１キロ左腕、喪失感を乗り越え

01/04 22:56 更新

星槎道都大野球部３年の滝田一希投手（２１）が、昨年の母の死を乗り越えてプロ注目の左腕として急浮上している。最速１５１キロの速球を武器に、プロ相手の練習試合で好投。大学日本代表候補にも初めて選出された。母子家庭で育っただけに一時は悲しみに沈んだが、「どんなにつらいことがあっても、（母を失った）あのつらさを上回ることはない。母さんのために、プロに行くしかない」と決意を固めている。

最速１５１キロの速球を武器にプロを目指す星槎道都大の滝田一希投手（村本典之撮影）

後志管内黒松内町出身で、寿都高では部員不足のため連合チームも経験。高校で全道大会出場は果たせなかったが、プロ選手を多く輩出する星槎道都大に進み、頭角を現した。

昨年夏に釧路市で行われたオープン戦で、プロ野球の福岡ソフトバンクホークス３軍を相手に６回１０奪三振、無失点と好投し一躍名を上げた。秋の札幌六大学リーグでは、開幕戦の先発を務めるなどリーグ優勝に貢献。１２月には日本代表「侍ジャパン」の大学代表候補強化合宿（松山市）に初めて選ばれ、速球と切れのあるチェンジアップなど変化球を武器に、紅白戦を２回無失点に抑えた。

順風満帆に見える１年だったが、５月６日、母・美智子さんを心筋梗塞で亡くした。享年５３歳。自分を含めた６人きょうだいを、老人ホームの調理やコンビニエンスストアの仕事を掛け持ちしながら育ててくれた最愛の母だった。「朝５時から夜中１時すぎまでずっと働いてくれていた母さんを、どうにかプロに行って楽をさせたいと野球をやっていた。その目標がなくなって本当につらくて、野球をやめようと思った」

亡くなる２、３日前、電話で話した。「春のリーグ戦の開幕戦に投げるよ」と伝えると、「けがだけはしないように。無理したら駄目だよ。気楽に頑張りなさい」。それが最後の言葉だった。高校生までは「ちゃんとしなさい」といつもしかられてばかりいた。地元の診療所で亡きがらと対面し、意外なほど穏やかな母の表情を見て、涙が止まらなくなった。

それでも、またグラウンドに戻って来た。大学日本代表候補合宿で同年代の選手たちの高いレベルにも触れ、成長への意欲が増した。「日々頑張っていかないと、お母さんが笑ってくれない。ちゃんと行動して、練習でレベルを上げないと、またしかられそうで怖いです」。亡き母への思いを胸に、プロを本気で目指す１年が始まった。（平田康人）